

台本トラック1：突然の告白

(ノックの音。二回。)

「……はい、どうぞ」

(ドアノブを回す音)

(キィというドアの開く音。小さめ)

「……あ！　こんにちは！」

(ドアの閉まる音。小さめ)

(ヒールで歩く音)

「どうかしましたか？」

「もしかして、怪我でも……？」

「違う……？　体調が悪い……？」

「……ああ、忘れていました。そういえば、今日は会社の一斉不用品整理の日でしたね」

「なるほど。貴女が医務室の担当なんですね。宜しくお願いします」

「助かりますよ。自分一人だと、その、言い辛いのですが、上手く片付けられなくて」

「減らさなきゃいけないのに、結局始めた時とあまり変わらないんですよね」

「そうだ。【掃除中】の札、表に出しておきますね」

「あ、適当に座っていてください」

(コツコツと早足で歩く音。徐々に小さく)

(ドアノブを回す音)

(ドアの開く音。小さめ)

(ドアの閉まる音。小さめ)

(コツコツと早足で歩く音。徐々に大きく)

「大丈夫です。始めましょうか」

(紙をバサバサと整理する音)

「向こうの棚をお願いします。奥に包帯や絆創膏があるのですが、もう古くなっているかもしれないですね」

(ヒールで歩く音)

(ガラガラと棚の引き戸、イメージはガラス戸を開ける音)

(↓ガチャガチャとモノを動かす音。不規則に、いくつか混ぜる。ここから。)

「あ、ありました？」

「そうです、その奥に……」

「……やっぱり、埃被ってましたね。入れ替えるので、外に置いておいてください」

「隣の棚は、食器ですね」

「たまにいろいろと相談されに来る方もいらっしゃるの、お茶を飲みながら、もあるんですよね」

(↑ガチャガチャとモノを動かす音。不規則に、いくつか混ぜる。ここまで。)

「そうだ、美味しい紅茶があるんです。冷やしてあるんですけど、嫌いでなければ如何ですか？」

(冷蔵庫を開ける音)

(取り出す音)

(冷蔵庫を閉める音)

(グラスに液体を注ぐ音)

「……どうぞ。甘いものが好みなら、ガムシロップをどうぞ」

「そうなんです。さっぱりしていて、飲みやすいんです」

「僕、紅茶が好きなんです。だから、常備していて。これは、ニルギリですよ」

「……そうなんです！ 嬉しいな、同じものが好きだなんて。良かったら、また飲みに来てください」

「色々と、茶葉を用意しておきますから」

「おっと、いけない。出した紙を片付けなければ」

「紙は持ち運びし易いように、縛っておきますね。要らないものですから、シュレツダーに後でかけようと思います」

(ビニールテープなどで縛る音)

「……はい！ お手伝い、お願いしますね」

「あ、そういえば……」

「……僕の名前、知っています？」

「(一息おいて)そう。向坂七瀬(さきさか ななせ)です」

「僕も、貴女のこと知ってますよ」

「えっ？ ……ああ、見かけますからね。外のコンビニとか。行くでしょう？」

「それに、ホラ」

「首から下げている社員証に、名前が書いてあるれ

「お話できて、嬉しいです」

「ん？ 人気？ 誰がですか？」

「僕が？ あははっ……そんなまさか……」

「うーん……確かに女性はよく来られますが……」

「医務室って珍しいかもしれないし、興味本位じゃないんですかね？」

「僕はあんまり、その、来られる方々には興味がないので……」

「いや、あ、なんか、変な言い方に聞こえたらごめんなさい！」

「どうせなら、自分の好きな人に、そんな風に来てもらいたいじゃないですか？」

「だから、他の人は、いいかなって、その」

「あー……上手く言えないな」

「……変じゃないですか？」

「良かった！ そう言ってもらえて、ほっとしました」

「あの……突然ですけど……好きな人、いたりしますか？」

「ちょっと、気になって」

「そうですか……気になる人……ですか……」

「あ！ 良かったら、もう一杯どうぞ！」

(グラスに液体を注ぐ音)

「美味しい？ ……ふふっ。確かに、それだけ飲んでいただけたら、美味しいと思っていただけているの、よくわかります」

「好みが、似ていますね。僕達」

「え？ 僕の好きな人……ですか？」

「いえ、興味本位でこちらに来られる方の中には、いらっしゃらないですよ」

「……苦手なんです。馴れ馴れしいというか、面白半分で来られる感じが」

「タイプ、ですか……」

「うーん、難しいな。でも、そうですね、好きな物を共有出来る方が良いですね」

「そう、思いませんか？」

「……爬虫類が好きっていうと、それなりの人が『えっ？』って顔されますよ」

「だから、好みは合う方が良い」

「では、僕からも」

「自分から、声ってかけられますか？　好きな人に」

「……(少し笑う感じで)そうですね。僕も難しいです」

「でももし。チャンスがあったら」

「逃さないですけどね」

「……今みたいに」

(服の擦れる音。)

「僕が貴女のこと、『好き』って言ったら、信じてもらえますか……？」

「……好きなんです。貴女のこと。ずっと見ていました」

「急にごめんなさい。でも、僕のことなんか知らないと思っていましたから」

「だから、知っていると分かって、とても嬉しくて」

「チャンスは逃したくないんです」

「だから……僕と、付き合ってください」

(ガシャンとガラスが落ちて割れる音)

「わっ！　大丈夫ですか！？」

「触らないで！　私がやりますから！」

「……貴女の指が傷付いたらいけない」

(↓カチャカチャとガラスを集める音。パターンを変えて、ゆっくりと。徐々にガラスの音を減らしていく)

「……それで、返事はその……」

「本当ですか！？　有難うございます！」

「ははっ、嬉しいな」

「……あ。なんか、こんな時にすみません」

(↑ガラスを集める音ここまで)

「終わりました。指、大丈夫、ですね？」

「良かった。貴女に何かあったら僕は……」

「チュッ」

「傍にいた自分を、許せなくなる」

